学長のアンソロジー

私の好きな音楽と文学

Select No.02

リューベックとトニオ・クレーガー

ブッデンブロークハウス

ホルステン門

2023年7月、北ドイツのキールでの学会後、小説家トーマス・マンの故郷リューベックを訪ねました。ドイツ国鉄のリューベック駅から東に歩き、ホルステン門をくぐると旧市街です。リューベックは、14世紀に最盛期を迎えたハンザ同盟の盟主として繁栄し、現在でも中世の面影を色濃く残しています。マンは名門商家の次男として1875年に生まれ、18歳までここで過ごしました。旧市街の真ん中にあるブッデンブロークハウスはマンの祖父母の家で、彼の長編小説『ブッデンブローク家の人びと』（1901年）、そして今回紹介する『トニオ・クレーガー（またはクレーゲル）』（1903年）の舞台です。

『トニオ・クレーガー』は、リューベックを舞台とするマン初期の自伝的小説です。文学青年の必読書であり、辻邦生や北杜夫など、多くの作家も愛読しました。私も20歳代に読み、言葉にならず感動しました。あらすじを解説するとネタバレになり無粋ですが、バルト海からのじめじめとした潮風の吹きつける陰鬱な街で、同級生の少年への思慕や、少女への片思いなどを通して、ありふれた市民生活と相克しながら自己を求め、芸術への愛を育んでいく物語です。薄い文庫本一冊の長さ、それほど難解ではありません。最近、岩波文庫、光文社古典新訳文庫から新訳が出ました。ぜひ手に取ってみて下さい。

余談ですが、ドイツの作曲家ディートリヒ・ブクステフーデは、17世紀、30年以上の長きにわたり、ブッデンブロークハウスの真向かいにある聖マリア教会のオルガニストを務めました。20歳の大バッハが、彼の演奏を聴くためにリューベックを訪問したことは有名です。彼の最もポピュラーなオルガン曲である「トッカータとフーガニ短調BWV565」は、ブクステフーデの影響を強く受けています。

学長　内木宏延